

## ダビデの三勇士

(サムエル23・13〜17)

### 一、三勇士の物語

13節をご覧ください。三十人のうちのこの三人は、とあります。三十人はだれをだしているのでしょうか。ダビデ王に仕えた職業軍人の内、表彰されるべき三十人です。新改訳によれば三人は三十人のうちの三人であり、だれよりも勇士であったと読めてしまいます。ですが、このは原文にはありません。したがって、「三十人のうちの三人は」と読みますと、その前に書かれている三人とは別の、匿名の勇士と言うことになります。ちなみに、口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳に、このはありません。

13節の続きを見てまいります。(三人は)刈り入れのころ、アドラムのほら穴にいるダビデのところを下って来た。ペリシテ人の一隊は、レファイムの谷に陣を敷いていた。とあります。これは、いつの時のことなのでしょう。内容からして、ダビデ王が兵隊の長として陣頭指揮を取っていた時のことでありましょう。ちなみに、サムエル記を底本として編集し、後に発行された歴史代誌は、この物語を、ダビデが王として即位した直後としています(↓歴史代誌11章)。

当時ダビデ王は自らが先頭に立ってペリシテ人と戦っていました。時にダビデは「アドラムのほら穴にい」と書かれています。そこは敵から隠れるにはもってこいの場所でした。14節に「そのとき、ダビデは要害におり」と書かれています。要害とは「アドラムのほら穴に」といふことの意味かと思われま。

その際、ダビデの口からある言葉が出てしまいました。15節です。「ダビデはしきりに望んで言った。「だれか、ベツレヘムの門にある井戸の水を飲ませてくれたらなあ。」と。なぜ、このようなことを語ったのでしょうか。それは、サムエル記にも歴史代誌にも書かれていないので、推測するしかありませんが、単に喉が渴いていたのではなかったようです。戦いの最中、飲み水は貴重ですが、水を飲みたいだけなら、どこの水でも良かったはず。ダビデはベツレヘムの出身でした。「ベツレヘムの門にある井戸の水」がおいしく、たましいを回復する水として思い起こされたのでありましょう。すると、16節です。「すると三人の勇士は、ペリシテ人の陣営を突き抜けて、ベツレヘムの門にある井戸から水を汲み、それを携えてダビデのところを持って来た。」とあります。この、一見したいことのないような記述に、ダビデがどんな人物であったかが表れています。三人の兵士たちは、ダビデ王から命令されてベツレヘムの

門にある井戸まで行ったものではありませんでした。全く自発的でした。14節に書かれていますように、ベツレヘムにはペリシテ人の兵士たちがいました。命を失うことを覚悟しなければなりません。ですが三人は何としても、ダビデ王が望んでいたベツレヘムの門にある井戸の水を汲んで届けたいと願いました。彼らがそれを行ったからとして、武勇伝に載るような性格の話ではありません。ですが、こういうところに、ダビデの人となり、そして信仰者としての姿が現れています。

さて、三人が持って来た水はどうなつたのでしょうか。16節後半から17節です。「ダビデは、それを飲もうとはせず、それを注いで主にささげて、言った。「主よ。私がこれを飲むなど、絶対にできません。いのちをかけて行った人たちの血ではありませんか。」彼は、それを飲もうとはしなかった。」とあります。ダビデはその水を飲みませんでした。ダビデにとっては、自分の命の重さも部下の命の重さも同じでした。だからこそ、その水は「いのちをかけて行った人たちの血」であり、飲むことはできませんでした。ダビデはその水を主にささげました。

### 二、自分自身をささげる

サムエル記は、この匿名の三人を高く評価しています。どうしてなのでしょう。

ようか。それは、新約の光に当てる時に、見えてまいります。主イエスはおっしゃいました。「ヨハネ15・13人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていない。」と。たいせつなものを献げたいという願いを持ち、それにいのちをかけること。それは説明されるまでもなく、美しいものです。使徒パウロは、ローマの地で自分が処刑される時期が近いことを知ったとき、次のように語っています。「ロテモテ4・6〜7私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来しました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」パウロは自分が処刑されることを前にして、すがすがしい気持ちであつたと推測できます。

この世に生を享けた者として、もつとも美しいことは、喜んで自分を犠牲にすることです。それは、一人ひとりが、いやいやながらでなく、強いられることなく、心で決めたとおりにすることです。結果として、聖霊による喜びが、自分の内にも満ち溢れるようになります。

三勇士の物語は、時代と文化を超えた神からのメッセージとして受け止めて良いのではないのでしょうか。なぜなら、イエス・キリスト御自身がそうだったからです。